



基地国家の誕生

南基正著、市村繁和訳（東京堂出版・4950円）

韓国ソウル大日本研究所長で文在寅前政権のブレーンでもあった研究者の、初の日本語訳の単著。戦後日本は、自分たちを「平和国家」と認識してきた。が、この自己認識は、自らの軍事力ではなく同盟国への基地提供で集団安全保障体制に寄与する「基地国家」としての性格を覆い隠す欺まんだというのが、本書の見立てだ。その欺まんが朝鮮戦争期にどう成立したかを、政府や産業界、右翼や左翼、学者やマスコミなどの動きを詳述して、テンポよく描き出す。こうして成立した日本の平和意識の実態が、「反戦」というよりも単なる「避戦」だとの指摘も鋭い。「基地国家」は、著者の言う「朝鮮半島休戦体制」を前提に、冷戦期を経て持続してきた。日本は朝鮮半島の分断を作った当事者であり、これを終わらせるため果たすべき役割がある。ただし、本書が語るとおり、日本の多数派は「基地国家」の現実を直視せず、無意識に肯定してきた。言いかえると、日本は朝鮮半島のような「戦場国家」にも、想像すらできない本当の「平和国家」にもなりたくないからこそ「基地国家」は持続し、今も持続させたがっているのではないか。

（生）